

あとがき

松崎正治（同志社女子大学）

「澤田英史 追悼記念号」をまとめながら、「偶然の必然」を思うことが多かった。

例えば、一九六九（昭和四四）年に、東京大学の入試が中止にならなかつたら。澤田さんは、京都大学法学部に現役で入学していて、文学とは深い関わりを持たない、全く違った人生を送っていたかもしれない。

例えば、一九八八（昭和六三）年に、ふと思いついて、神戸大学大学院教育学研究科の門をたたかなかつたら。学習者中心の読むことや書くことの国語教育実践を豊かに展開し得なかつたかもしれない。

例えば、一九八九（平成元）年に、友人の訃報を知り、その時の思いをこめた短歌を朝日新聞に投稿しなかつたら。その後の彼の人生を支える短歌創作は始まらなかつたかもしれない。

今回、澤田さんの人生をたどればたどるほど、いずれも偶然の出会いであるが、しかし澤田さんの奥深くにある何かに向かう必然でもあった

ように思われてならない。その「何か」とは何か。例えば、澤田さんが短歌を通して凝視した自己が見える次の歌。

〈誰ひとり棲まはぬ星が巡りをり我がうち深き闇の軌道を〉（『澤田英史

集』 邑書林 二〇〇四年 六一頁）

〈人としての核の部分を凍らせてうはべばかりに歩み来しわれ〉（同上書 七五頁）

「核の部分」は、一人ひとりが違うかもしれないが、それを凍らせているという感覚はよく分かる。澤田さんが、短歌という道具を媒介にして、人生を深く見つめて切り取った世界が、多くの人が見えないもの、見ようとしなかつたものを見せてくれる。そして、人生の意味、自分というものの存在を考えるきっかけを与えてくれる。

それは、澤田さんの国語教育実践でもそうだ。枠組み作文は、自分にはない発想法で、言葉にならなかつた自分の思いを引き出してくれる。

澤田さんは、あのにこにこした笑顔で、私たちの何かを引き出してくれたのだ。それが彼の必然だった、と私には思える。

この小さき冊子を澤田英史さんのご霊前に捧げる。